

「ほんやくコンニャク」を实践したい

久しぶりの通信になりました。少し授業づくりから離れてしまってますみません。今回も授業づくりからは離れてしまっているのですが、仕事のひと息に心安らぐ文書を見つけたので紹介します。

ちょうど、先日秋の大会を見に行くと、他校の先生が自分の生徒に向かってこんな声援を送っていました。子どもがいいプレーをした後なのに…

「いいよ。いいよ。ナイスプレー。明日雨が降らんかったらいいけどなあ。」

「ナイスプレーや。今まで見たことないプレーや。まぐれでもよーできた。」等々。とても気持ちよく観戦できたとは言えませんでした。

いつも、企業から提供いただいている PHP に次のような文章が載っていましたので紹介します。

算数の授業が終わろうとしていた時のこと。多くの子が課題をやり終えて、筆箱などを片付けています。

ところが、剛士さんだけは、座ったままで片付けようとしません。どうやら課題ができていない様子。ひときわ大きな体からイライラが伝わってきます。

その様子を見ていた指導補助の高橋先生は、お母さんの存在の先生。剛士さんに近づき穏やかに声を掛けました。すると剛士さんは、「うるせえ、クソババア。あっちへ行け」と言ったのです。

こういう言葉を聞くと放っておけないのが教師。剛士さんを注意しようとした時、高橋先生が剛士さんよりも低い目線になるように座り、こう言われました。

「課題難しいね。剛士さんのところに早く来なくてゴメンね。一緒にやってみようか。」

それを聞いた剛士さんは、「うん」と言って課題に向かい始めました。

こんなこともありました。

お弁当持ちの校外学習から帰ってきた剛士さん。高橋先生が、「剛士さん、校外学習、楽しかったでしょう。お母さんのお弁当も食べられたしね。」

剛士さんはニコニコと対応するかと思いきや、怒った声でこう言い放ったのです。

「弁当の量が少なくて、嫌だった。お母さんは、もっと弁当の量を多くしてくれたらいいのに。校外学習、楽しくなかった！」

聞いていた私は「弁当の量が少なくて、校外学習が楽しくない…どういうこと。」と思ったのですが、高橋先生は間髪を入れずにこう言われました。

「剛士さん。お母さんの作ったお弁当が美味しかったから、もっと食べたかったんだね。」

その言葉を聞いた剛士さんは「そうそう」と笑顔になりました。

放課後、高橋先生に、「どうして、子供への声掛けが、こんなにもお上手なのですか」と尋ねると、高橋先生は、ゆっくりとお話くださいました。

「子どもたちの中には、自分の思いを適切な言葉で伝えにくい子がいます。剛士さんは、そもそも持っている言葉の数が少なく、特に自分の気持ちを言葉で表すことが苦手なんです。さらに、感情のコントロールもできにくいので腹立ちまぎれに、相手を非難してしまうのです。」

なるほどなああと聞いてみると、続けてこうおっしゃいました。

「『ドラえもん』の道具に『ほんやくコンニャク』ってあるのをご存知ですか。そのコンニャクを食べると、動物の言葉が分かるようになるんです。」

私も、子供の声を聞くときは、ほんやくコンニャクのことを思い出しています。そして、『この子は、本当は、なんて言いたいのかな』と考えているんです。」

誠にあっぱれ。高橋先生のような方が静かに子どもたちを支えてくださっているんです。

PHP (令和3年11月号) 西村徹 著、PHP研究所

子どもの心に寄り添うことができる言葉って、気持ちがいいですね。

・・・ to be continued ・・・